

特集 2018「酷暑の夏、終わる…」

武井様・北総の皆様

今日(8月6日)はどのような暑さも我慢しなければと思います。あの日の朝、気候は今日ほどではありませんが、突然落とされたあの原子爆弾の猛威は計り知れません。それでも当時の惨状をどうしても伝えておかななくてはという思いに駆り立てられ、語り続けている年老いた被爆者の方々には頭の下がる思いです。ただ語り伝えようとすればするほど、「いやもっともっとひどかった」というもどかしさをぬぐい切れないというのも正直なところだろうと思います。あの惨状を語り切れるほどの言葉を人間は持っていないのです。

千羽鶴を奉納した際の写真を同封します。子どもたちは現場に居合わせた子どもたちです。たぶん兄弟でしょう。原爆ドームの後ろは商工センターです。後ろに何も入れないことは難しいです。

慰霊碑の前に立ちながら改めてなずな合宿研究会のメインテーマである「平和なくして福祉なし」の言葉を思い出していました。現状には原理さんも嘆いていることと思います。あとに続く者として「私たちは微力であるが、無力ではない」という言葉かみしめて、あきらめず平和の世を目指していきたいものです。

北総に学びながら、ひとはもついでいきたいと思います。

どうかみなさん、お元気でご活躍を!

合掌
寺尾 文尚

北総では毎年四千羽の折り鶴を利用者、職員で折っています。その折り鶴は千羽鶴となって①長崎②広島③沖縄④福島(東日本大震災被災地)、それぞれの地に届けられます。広島への千羽鶴は園長の古くからの友人である寺尾先生が届けてくださっています。8月に入り寺尾先生からメールで一報が入りました。

「報告が遅くなって申し訳ありません。3日11時ころ、平和公園に行き皆さんの願いを込めた千羽鶴を奉納してきました。

3日は今日の準備段階のため、まだ混雑という状況ではありません。そのため、ゆっくりと思いを込めて慰霊碑の前に立つことができました。

それから貞子の像のそばにある千羽鶴の設置場所に皆さんに代わって奉納してきました。

皆さんのおかげで胎内被爆者である私も、その地にうごめく無念の死を遂げた人たちと無言の対話ができました。

私たちは微力ではありますが、無力ではありません。お互いに平和社会を目指して手をつなぎましょう。

尚、3日の写真は後日送ります。
寺尾 文尚

①平和なくして福祉なし 広島からの便り

北 総 の 里

発行日 2018. 10. 1
第 240 号
(第 1 回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました!

施設の概要や理念、利用者の様子、園長からのお知らせ等、盛りたくさん!ぜひアクセスしてみてください。

ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp



▲寺尾先生が平和記念公園にいた小学生に声を掛けて、北総の千羽鶴を持った写真を撮ってくださった。何とも嬉しい平和の便りである。H30.8.3



広島平和記念公園。モニュメントの先には ▶ 原爆ドームが見える。H30.8.3



夏の暑さを
終わる……
「酷暑」
特集

② 第29回なずな沖繩障害者教育・福祉合宿研究会に参加して

H30.6.22
～25

今回、「第29回なずな沖繩障害者教育・福祉合宿研究会」に武井園長、高木さん、師岡さんと参加させていた。原理先生がご逝去してから初めてのなずな合宿となったが、映像や資料、そして参加者皆さんの言葉を通して原理先生の教えを改めて学ぶことができた。

最初のプログラムは1991年にNHKで放映された原理先生主宰の「なずな園」の日常を描いた「なずなの日々」のVTR鑑賞。一人ひとりの個性を尊重し、一人ひとりに役割と出番を用意すること、字が書けなくともたくさんの○や線で綴ったノートを見てその方の思いを感じ取る細やかな視点、お互いの顔を立てながら助け合って生きている姿がそこにあった。これはなずな園のような小規模で家庭的な環境でなければ不可能ではなく、この思いがあれば北総のような大人数で暮らす入所施設でもなずな園のような細やかな支援はできると思うし、入所施設だからこそ持たなければならぬ視点だ。そのヒントがVTRの中に随所に散りばめられていたと思う。

次は原理先生原案の「おふくろに敬礼」のVTR鑑賞。浜木綿子さん主

演の人気ドラマシリーズ。知的障害の息子を持つおふくろの視点から、地域で当たり前に暮らしたい願いと、そう上手くいかない現実の中で、諦めずに希望の光を灯しながら、様々な人との出会いを通して成長する息子の姿が描かれていた。原理先生が話されたなずな園の利用者の方のエピソードがドラマの中でも再現されており、障害を持つ方がそうでない方と地域で共に生き生きと生活する為に必要な構えや、細やかな配慮が描かれておりとても見応えがあった。

続いては「原理先生を語る」と題して武井園長と福岡の大場先生が、原理先生の思い出を語られる。園長のユーモア溢れる語り口で話される原理先生と園長の出会い、千葉なずなホームの誕生、原理先生の晩年の願いに込めた椎茸園作り。どれもが原理先生と園長、引いては北総との大切な思い出である。

夜は蒼生学園の皆さんとの懇親会。北総からは千羽鶴の紹介もさせていただき、原理先生の「平和なくして福祉なし」の教えを大切に、利用者と共にその思いを具現化していることをアピールできた。

2日目最初のプログラムは、沖縄

戦証言記録「軍隊のいた島」のVTR鑑賞。慶良間諸島の座間味島、渡嘉敷島での沖縄戦の実態が、集団自決から生き残った方々が語られる。渡嘉敷島はまさに今日の午後から我々が渡る島であり、千羽鶴は渡嘉敷島の集団自決の碑に献納する予定。こうして実際の映像を観させていただくことは本当にありがたいことであった。また、講師を招いての講演では「隔離を生きて」というタイトルで、かつてハンセン病患者であった平良仁雄さんの体験談をお話いただく。先ほどの渡嘉敷島での集団自決のインタビューを受けた皆さんもそうだが、平良さんも元ハンセン病のガイドという役目を負うことで何度も何度も辛い記憶を思い出し語らなければならぬ。それでも語ってくださることに最大の敬意を払いたい。その敬意は私たちが誤解と無知から来る偏見と差別をしない人間になることだと胸に刻んだ。

本当に充実した2日間となった。



▲伊江島に唯一残る戦跡、公益質屋跡。海に面した南側には艦砲射撃による大きな穴が開いていた。
H30.6.22

毎年、声を掛けてくださる砂川先生はじめ、蒼生学園、蒼生ネットワークの皆様へ感謝し、この研修で学んだことを糧にして北総での日々を丁寧に重ねていきたいと思う。(絵嶋典子)

■伊江島、渡嘉敷島の戦跡を訪ねて

今回の研修ではなずな沖繩合宿に参加するだけでなく、なずなの原点でもある「平和なくして福祉なし」の理解を更に深めるため、沖縄本島から船で渡れる伊江島、渡嘉敷島の戦跡を訪ねることも大きな目的であった。

伊江島は本部港からフェリーで約30分。沖縄戦では「東洋一」と言われる飛行場があったことから、米軍の徹底攻撃を受け、日本軍の守備隊2700人の内2000人が死亡。島民も1500人が死亡した。生き残った島民も慶良間諸島に強制移住させられ、2年間のあいだ米軍だけの島になったという。6月22日午後、大型フェリーに乗船、伊江島に到着。一路「公益質屋跡」を目指す。沖縄戦で島内の建物はことごとく焼き払われ、かろうじて原形を保っているのは、この公益質屋だけだそう。島のシンボルでもある城山(タッチュー)に日本軍の陣地が作られたが、米軍は海からこの城山に向け艦砲射撃を繰り返した。公益質屋は海と城山の間にあり、海のある南側の壁面に米軍の艦砲射撃による大きな穴が開いており、艦砲射撃の凄さを物語っていた。

6月24日、なずな沖繩合宿2日目のプログラムで沖繩戦証言記録「軍隊のいた島」の映像を見た。ちょうどこの日の午後に行く予定の慶良間諸島の集団自決についての記録映像であり、私たちにとってグッドタイミングの映像だった。慶良間諸島の島々の中、これから行く渡嘉敷島を含めて3つの島に日本軍の守備隊があり、米軍が来た際は人間魚雷で反撃する計画だった。小さな島ゆえに住民も軍と一体化しており、軍の機密情報も知っていた。これが悲劇を生む要因になった。守備隊トップは後に「自決命令は出していない」と言っていたが、生き残った住民は「軍に強制された」と証言している。どちらかが嘘をついていることはないと思うのでギリギリの状況の中で誤解や忖度があったのかもしれない。でも個別に見ればそうかもしれないが、集団自決は沖縄本土の各地でも起こっているのだから、そこに至る明らかな理由があると思う。そこをなんとか突き止めたいと思った。

なずな沖繩合宿を終え、渡嘉敷島への高速船が出る泊港へ。渡嘉敷島には35分で到着。島に上陸するとレンタカーを借りて戦跡に向かった。最初に見たのは「白玉之塔」で朝鮮半島出身兵の慰霊塔もある。日本の守備隊は全滅したが、その中に朝鮮半島出身の兵もいた。次にいよいよ島民の集団自決跡地に向かった。慰霊碑の脇を抜けて暗い森の中に入り、谷間に向かつてわずかに下っていくと集団自決のあった場所に出た。本当に狭い谷だが、意外と水量の多い小川が流れているのが不思議な感じがする。この暗く狭い谷で住民同士が殺し合って集団自決したという光景は地獄絵図そのものである。そのような人間性を放棄したような行いがなぜ起きたのか、単に兵隊がいたからと言う表面的なことだけでなく、もつと根本的な原因を探りたいと強く願う。北総の皆で折った千羽鶴を慰霊碑に納め手を合わせる。



▲渡嘉敷島集団自決跡地。近くには小川が流れるこの山の中で、73年前、地獄のような現実があったことを決して風化させてはならない。H30.6.24

「平和とは戦争のない状態ではなく、皆の心の中に平和の砦を築くこと」との言葉があるが、心の中の平和の砦とは差別心のない、全ての人に等しく価値を認める心だと思う。だからこそ平和の原点は福祉の現場にあると改めて感じた研修となった。

■平良仁雄氏講演

（高木恭一）

「隔離を生きて」をお聞きして
私は今年、なずな沖繩障害者教育福祉合宿研究会に参加させていただき、平良仁雄さんの「隔離を生きて」という講演を聞かせていただきました。平良さんは、9歳の時にハンセン病に罹り、強制的に家族と離れ、隔離された療養所で治療されてきたそうです。
ハンセン病とは、日本では「らい病」と呼ばれ、症状として顔や体の変形を引き起こすこともあり、長い間忌み嫌われてきました。らい菌は弱い菌であり、空気中ではすぐ死んでしまう菌であることが、明治6年ノルウエーのハンセン医師により発見されました。昭和18年にはプロミンという特效薬も出来て、治療法が確立されたにも関わらず、差別と偏見は続きます。らい予防法が平成8年に廃止されるまで、国による強制隔離政策は続けられました。一度ハンセン病患者となれば、親や兄弟姉妹と一緒に暮らすことができないう、実名を名乗ることができない、結婚して子供を生むことが許されないう、一生療養所から出て暮らすことができない、死後の遺骨さえ、家に帰すことは禁じられていました。



▲第29回なずな沖繩障害者教育福祉合宿研究会2日目。講師の平良さんの魂の叫びを聞いた。H30.6.24

平良さんはハンセン病が回復し、施設を出て理解ある女性と結婚、子どもも5人授かったそうです。しかし、その後ハンセン病が再発。病氣のことを理解してくれていた奥様ではありましたが、差別や偏見から辛い思いをされて、お子さん達の前で首を括り自殺されたそうです。その後平良さんは5人のお子さんを育てあげられました。平良さんは今年79歳になられますが、声も大きくとても力強い話し方で「私は腹の底から話している」とジェスチャーを交えながら、受講者一人ひとりに訴えかけるように心を込めて話してくださいました。今も平良さんは開放された療養所を理解してもらおう為にガイドをしておられます。無知と無関心は、差別と偏見を生みます。私も福祉を志す者として、苦しめられた歴史を繰り返さぬように日々頑張りたいと思いました。
（師岡小百合）

「夏の暑さ
終わる…」
特集

③長崎の姉・コスモス会研修

H30.
8.6
~9

毎年8月は長崎の姉、コスモス会へ研修に伺っています。姉妹の縁を結び今年で26年。頻繁な行き来はできませんが、毎年1回はお互いの施設を訪問し学び合う交流を大切にしています。今年は8月7日~8日、武井園長、保科主任、高橋さん、平塚さんの4名でコスモス会を訪ね、本田利峰理事長はじめ職員、利用者の皆さんが温かく迎えてくださいました。また、コスモス会研修の際は必ず平和公園、原爆資料館を訪ね「平和なくして福祉なし」の思いを胸に刻む機会としています。研修に参加した職員のレポートを掲載します。

■コスモス会研修で

利峰先生から学んだこと

前年度に引き続き長崎コスモス会平和研修に参加させて頂いた。園長より、ただ見学するだけではなくコスモス会が展開している就労支援、グループホームなどの基本的な知識を事前学習して質問できるようにすることが大切とアドバイスをいただいた。そこで実際に就労移行支援、就労継続B型を展開している笹川なずな工房へ出向き、荒井施設長よりお話を伺い、事前学習をした上で研修に臨んだ。

8月7日、いよいよコスモス会本

部へ。炎天下の中、たくさんの方の利用者、職員の皆さんが歓迎のプラカードを持って我々を迎えてくださった。武井園長も久しぶりのコスモス会の皆さんとの再会に言葉に詰まる部分もありコスモス会との深い絆を感じる場面でもあった。

その後利峰先生との歓談の時間を頂く。利峰先生のお話の中で印象に残っているのが、決算の数字を見てそれを踏まえて自分の仕事、施設の変動を解析することが大切と話してくださいました。今回研修に参加する前に事前学習として障害支援区分に応じた給付の配当に関しても白樫副園長より説明を受けた。今自分の給料がどこから出ているのか、今の



▲炎天下の中、プラカードを掲げて歓迎して下さったコスモス会の皆さん。年に一度の再会でも姉妹の絆は強く結ばれていると実感する瞬間。
H30.8.7

北総の収入はどれくらいなのかを数字で理解することで、更に意識して仕事に取り組みると感じた。

2日間の研修の中ではたくさんの方の事業所にご案内いただいた。その中で印象に残っているのが「アステック」という一般的な放課後等デイサービスとは少し違うサービスを展開する事業所。中学生や高校生などを対象とし、将来就職する上での基本的な訓練を目的とした全く新しい事業とのこと。建っている場所もバスなどの交通の便が良く、建物が沢山建っている町中にある。福祉施設は町から離れた自然の豊かな場所にあるイメージがあるが、こういった場所での運営すること、地域の福祉への考え方も変わってくるのではないかと感じた。

夜は論所原で懇親会を開催していただき、私も利峰先生とお話をさせて頂いた。その中で「どうして幅広い事業展開をするのか」と質問をした。それに対し利峰先生は「障害者に選択肢をなるべく多く作ってあげたい。一回で複数の仕事をするのは苦しい。一つ一つの事に集中する仕事があればそれで活躍できる。人と関わる仕事は苦手だが、料理などの技術はあるなど、実際はもっとできるのに選択肢が少ないせいとその人の実力が無駄になってしまう。そのために色々な事業展開をすることで、どんな人が来てもその人が自分の力を思う存

分發揮できる環境を提供したい。」と話して下さった。中高生から放課後等デイで就労に必要な技術を学び、就労では自分の得意なことを活かせる場所を精一杯汗を流し働く。段々身体が追いつかなくなったらグループホームを利用して生活支援を受ける。子どもから高齢になるまで、支援を受けられることは親御さんからしても安心して繋がると感じた。そして利峰先生は「私は数学が得意で数字は絶対嘘をつかない。1+1は必ず2になる。でも武井さんの『一期一会 一輪の花』は必ずしも一つの答えにならない。いつも武井さんは私に一生かかっても解決できない宿題をくれるんだ」と笑顔で話してくださいました。利峰先生、武井園長、それぞれお互い刺激し合う思考を持っているからこそ、コスモス会との長い交流の歴史が今もなお続いているのだと私自身感じた。

こういった貴重な話を伺える機会をいただいたことを大切に今後の仕事に活かしていきたい。(高橋洋平)

■長崎・平和公園を訪ねて

長崎の姉、コスモス会への研修の際は必ず平和公園や原爆資料館を訪ね、北総の皆で折った千羽鶴を献納している。この取り組みも今年で26年になる。今年は8月6日、平和公園へ。平和の像の前で写真を撮る時、お願いした方が「千葉からですか?」と千羽鶴に書いてあった北総の名前

を見て聞いてくれ、その方たちも千葉県から来たことを教えてくれた。千羽鶴には必ず「千葉県・北総育成園」と名前を書いているが、見てくれている人はきちんとすることや、北総育成園を知ってもらう機会としては意味のあることだと改めて感じることができた。千羽鶴は平和の鐘の前に献納。平和公園は9日の式典に向け、原爆被災時の写真パネルが展示されていた。幼い兄弟が助け合う姿や、おにぎりをもらい食べる親子の姿、酷い火傷で皮膚が垂れ下がっている姿、原爆で吹き飛ばされて荒地となった街の様子が生々しく写し出されており、原爆の恐ろしさや惨さを感じた。また、平和公園内には「平和の泉」があり、石碑に少女の言葉が刻まれている。

『……のどが渴いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。』
この言葉を読むと胸がしめつけられる思いがした。幼い子がなぜこんなに苦しい思いをしなくてはならなかったのか？私は犠牲となつた沢山の方のご冥福をただ祈ることしかできなかった。

(保科智子)



▲長崎平和記念公園、平和の像の像にて。「平和なくして福祉なし」の想いを具現化した北総の千羽鶴を今年も届けることができた。H30.8.6

■水俣病資料館を訪ねて
「水俣病」。誰もが一度は耳にしたことがあるだろう。私自身その名は聞いたことがあり、四大公害病の一つに数えられていることは知っていたが、恥ずかしながら踏み込んだ知識や情報は全くといっていいほど知らなかった。園長からも「水俣病被害については我々が知っておかねばならないことだ」との言葉があり、今回熊本水俣市、水俣病資料館を訪ね水俣病について学ぶ貴重な機会を得た。

「水俣病」は熊本県の水俣湾周辺に1953年頃から発生したメチル水銀中毒による慢性的神経系疾患。手足や口周辺のしびれが始まり、言語障害、視野狭窄、運動障害、聴力障害などの中枢神経系の障害が起こる。重症者は回復がきわめて困難で、多数の死亡者が出た。原因はチソ水俣工場の化学製品の製造過程で副生したメチル水銀が持続的に水俣湾へ排出されたことによる。水中で希釈されたメチル水銀が、水中生物の食物連

鎖を経ることにより魚介類が汚染されていった。その有毒化した魚介を摂取した人々に健康被害が広がっていった。公に水銀の影響が認められた患者は1万2615人。これ以外に、自分の病気を知らないで亡くなった人たちや、差別されるのが嫌で申し出なかった人たちがいるので、正確な被害人数は把握できていないようだ。水俣病が認定されてから60年あまり。目の前に広がるこの海に38年間にも及ぶ長きに渡って有毒物質が垂れ流しとなり、人々の健康や日常を壊していったのかと思うと言葉を失う。もっと早く対処していれば救われる命もあつたであろう。経済成長や利益を優先した工場や行政の罪は重い。今も工場が同じ場所稼働し存在していることにも衝撃を覚えた。高い壁に覆われゲートは固く閉ざされ見ることはできなかった。重要な産業であり雇用も生まれる。被害者感情と工場によって支えられている人々の生活は天秤にかけられるようなものではないし、排除すれば解決するようなものではないところに、この問題の難しさを感じた。水俣病資料館を見て回る中で、何よりも胸を締め付けられたのが、患者や家族に対するあまりに酷い差別である。当初は伝染病や遺伝病と誤解され、「うつるから近づくな」等と陰口や暴言を吐かれたり、患者や家族は道を使わせてもらえなかったり付き



▲水俣市立水俣病資料館。館内は撮影禁止であった。無知と誤解は偏見と差別を生む。水俣病患者の苦しみは想像を絶するものであった。H30.8.8

(平塚恵理)

合いを許されなかったり不当な扱いを受けた。また、水俣を通る時だけバスや車の窓を閉めるといった差別もあつた。今のように技術も未発達で情報を得る手段を持たなかった人々が、病气や患者を恐れ隔離してしまいう気持ちにも一定の理解は示す。技術が発達し容易く情報を得られるようになった今の時代であっても差別・偏見は起こり、問題の根は深い。無知・無理解を恐れ恥ずべきこととして、差別・偏見に陥らない自分でいたいと強く思った。また、水俣病患者の苦しみを描いた「苦界浄土」等の作品で知られる作家の石牟礼道子氏についても園長から教えていただき、資料館で学び興味を持った。活字は苦手であるがせつかくの機会。作品に触れ、もう一歩踏み込んで水俣病に対する理解を深められたらと思う。

街道をゆく

138

炎天を頂いて乞い歩く

武井 敏朗

今年の夏は本当に暑い夏だった。こんな時、山頭火のこの句を思い出す。

自由律俳句誌「層雲」主催者である萩原井泉水は1884(明治17)年に生まれ、1976(昭和51)年に亡くなる(享年92才)。

乞食坊主姿で孤寒の一人旅を生きた俳人「山頭火」は1882(明治15)年生まれ1940(昭和15)年に突然死(享年58才)。近藤益雄は1907(明治40)年生まれ1964(昭和39)年に亡くなる。(享年57才)。

近藤益雄(えきお)などと気安く書いたが、益雄は昨年亡くなられた近藤原理先生のお父さんである。近藤原理先生は1931(昭和6)年生まれ昨年2017(平成29)年86才で亡くなられた。

上記した故人のつながりについて書く。読者諸氏は俳人「山頭火」を知っている。自由律俳句を生きた人である。《音はあられか》《分

け入っても分け入っても青い山》《後ろ姿のしぐれていくか》等、膨大な自由律俳句を残した。その句は新たな読者を獲得。時代を越えて読み継がれている。筆者も学生時代にこの「山頭火」の句に出会う。管理された社会から脱出したようなその生き方がかつこよく見えた。残された日記を読むと、いじいじした甘えんぼ坊主のようにもみえるが。乞食坊主姿で山野を歩く彼の姿。一度でいいから会いたかった。

この山頭火が井泉水主宰の「層雲」に投句をはじめたのは1911(明治41)年のこと。近藤益雄がやはり層雲に投句したのは1952(大正14)年のこと。その後この二人は「層雲」への投句を通して手紙のやりとりも発生する。昭和6年生まれの原理先生は山頭火が亡くなる昭和15年までに本人に直接会うことは無かったが、同時代を重ねた。その原理先生が筆者の手紙に返書をくれた。

「……。私の幼い頃、山頭火さんが平戸に見えるというとき(父も自由律俳句をたくさん創っています)、祖母(マス)が父に『エキオさん、コジキ坊主バ、うちに泊

めたらいかん』と言っていたのを思い出します」と書かれてあった。山頭火全集全14巻が手に入った。原理先生が幼児の頃、父、益雄は山頭火と会っていっぱいやっていった形跡が書かれている巻が見つかった。

昭和十年九州の山里、海辺を行乞行脚。真夏の炎天を歩く山頭火。こんな句が生まれた。《炎天を頂いて乞い歩く》。今日は三銭、五銭と儲かった。焼酎より酒がいい。女もほしい。安宿で朝から一杯やっ

た。朝鮮の人が同宿したとか、筆まめな山頭火の日誌にはその日の出合いが事細かに書かれている。平戸のことが書かれている行に入る。「……。平戸というところは人の心までうつくしいと思っ

た。……しかし、行乞中運悪く二度も警察に咎められた。そこで一句。《巡査が威張る春風が吹く》。……平戸町内ではあるが、一里ばかり離れて田助浦という美しい浦がある「……。益雄の勤めている田助尋常小学校の前の道を山頭火が歩いている。きつ

とこの晩、山頭火と益雄は木賃宿で一杯やったのであろう。それとも近藤家に上がり込んだのだろうか。幼い原理先生はもしかして山頭火の腕に抱かれたか……。(文中敬称略)

筆者の選んだ自由律俳句

層雲 同人 三人三句

・ 師匠 井泉水

・ 机に誰か置いた花で匂うている
・ 生きていれば逢えることの旅で萩さく

・ あわれはぜの口からとった餌で又つれる

・ 門人 山頭火

・ 酔うてこおろぎと寝ていたよ
・ 年とれば故郷こいしつくつくばうし

・ こんなにうまい水があふれている

・ 門人 益雄

・ 朝涼の蚤がはねて今日も青空
・ ヒョイト釣られたドンコではねる
・ だいこんの芽、いい雨でござんした



▲山頭火。「漂泊と放浪の人生であった。」

みんなの広場

■Hさんのこと

Hさん、Kさん、Aさん、病院に移ったFさん、女子利用者の高齢化、介護の高まりが顕著であった今年度。「おい、色黒のせんせい」「面白い顔の先生」「おこりんぼう」等と色々な呼び方で呼んできたり、ユーモアのある会話で楽しませてくれたHさんも、言葉数が少なくなり眠って過ごすことも増えてきた。それでも声かけに對して「うーん」と返してくれたり、左手をかすかに動かして反応してくれたり、園長が来ると顔を上げ表情が良くなったりする。言葉が聞けたり、笑顔が見られたり、小さな表情の変化でも嬉しく思える。毎日、嫌がられるくらいに声をかけて、表情や言葉、少しでも引き出していけたら……と思う。

(平塚)

■酷暑を乗り越え今思うこと

今年の夏は、女子利用者の体調面等でたくさんの変化があった夏でした。Fさんが入院してしまったり、Kさんが体調を崩してしまったり、特に女子利用者の介護度が一気に上がりました。いつ体調を崩してしまってもおか

しくない状態であったため、常に緊張感を持ちながらの支援が必要でした。今、Kさんはまだ安心はできないものの、食事も良く食べられるようになりました。Fさんは病院に転院となり、少し寂しい気持ちではありましたが、Fさん自身にとっては良かったのではないかと思います。まだまだ北総には車イスを使っている方や高齢の方がたくさんいます。これからどんな介護度が高くなってくると思いますが、今年度は酷暑でしたが利用者みなさん体調を大きく崩すこともなく夏を乗りきることができました。Fさんも無事に病院に送り出されました。大変ではありましたが、この経験を今後の支援にも活かしてこれからも頑張っていきたいです。

(木村)

■環境整備で学んだこと

今年も酷暑の中、昨年に引き続き私は環境整備に携わりました。昨年は初めての草刈機の使用ということもあり、なかなか上手く草を刈ることができませんでしたでしたが二年目の今年はいよいよ上達したと自分では思います。しかし、仕上がりを確認してもらおうと細かな所で刈り残しがあったり、全体的にムラが出てしまっていたり、まだまだ甘い部分がありました。もう少し細かい所まで注意を払い最後は全

太田川のほとり (134)



夏季研修で福島県いわき市を訪ねました。3・11東日本大震災から7年半が経ちます。復興が進む一方で、福島県は原発事故を抱え、今なお大変な生活を余儀なくされている方も多い現実があります。今回は、津波で甚大な被害を被った塩屋崎灯台を訪ね、北総の皆が心を込めて折った千羽鶴を体を確認しなければいけないなど思いました。

これは普段の支援にも通ずることなのだとうと気が付きました。自分の担当する寮の利用者の方一人一人に細かい注意を配り、その上、全体を見渡す広い視野がなければ支援員としてはまだ半人前です。環境整備を通して、支援に必要なことを学べた今年の夏であったと感じました。今年もまだ環境整備は続きますが体調に気を配り取り組んで行きます。

(菅崎)

■共に汗を流した仲間たち

猛烈に暑かった。8月23日には、埼玉県熊谷で日本歴代最高となる41.1℃の暑さを記録。東京は平年で6月5日から夏日となり夏の期間が4か月弱。1年の3分の1が夏になりつつ

届けるという役目も持ったの夏季研修となりました。

8月24日午後、塩屋崎灯台に到着。急な階段を上がり灯台へ。管理人の方に経緯を話し千羽鶴を見せると近くに修徳院というお寺があり、慰霊碑もあるのです。お寺に持っていかれてはと教えていただいたので、そちらに持っていくことに。また、7年前の東日本大震災での津波ではこの海沿いの地域で修徳院だけは流されず残ったと教えてもらいました。

千羽鶴を持ち、修徳院を訪問。住職の奥さんがいらしたので経緯を話すと「遠いところからありがとうございます。本堂の方に置かせていただきます。」と快く受け取ってくださいました。これからは福島の皆さんに心を寄せて、復興に向けて自分のできる事を微力ながらもやっていけたらと思います。

(鈴木)



▲大津波に流されず残った修徳院に千羽鶴を献納。H30.8.24

あります。暑い日差しと地面から押し上げて来るような熱気を全身で感じながら日中の作業を行いました。草取り、枯れ葉・枝集めの環境整備が主な仕事。麦わら帽子を被り坂道を登り降りするので立っているだけで額から汗が流れてきます。「みんな頑張らしましょう!!」自身にも言い聞かせるように利用者さんに声をかける。返事はない。しかし、しっかりと作業で応えてくれる。誰一人として文句は言わない。愚痴も言わない。弱音もはかない。黙々と働きます。「暑い」なんて恥ずかしくて言えなくなり「働くと生きること」これは北総の理念です。利用者さんはこの理念そのものです。そしてこの理念を守り続けています。そんな利用者さんと「共に生き共に汗し共に育つ」ことができる私は幸せ者だと、暑さを乗り越えた今、強く感じています。来年の夏、私が利用者さん以上の力を一人一人に分け与えられるまでに成長できているよう日々勉強していきたいと思っています。

■Kさんの今に寄り添う

(西原)

私は1年前、新職員として陶芸班に所属し、少しずつ利用者さんとの信頼関係を築いてきたが、一人だけなかなか心を開いてくれない人がいた。Kさんである。私の声掛けに対して聞かないふりをした日があるかと思うと、自分から話し掛けてくる日もあり、とにかく試し行動が多かった。なかなか対応が上手くいかず、作業場で喧嘩をしたこともあった。Kさんの心境としては、自分とこれから関わっていく人がどういう人か知りたかったのである。

ある日突然「日色さん!」と名前を呼んでくれた時はすごく嬉しかった。しかし、その後Kさんは急速に介護度が高まり、もう一緒に作業をすることは叶わなくなりました。

こんな私に心を開いてくれたKさん。Kさんの「今」にこれからも寄り添って行こうと思う。(日色)

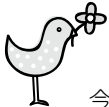
■明日はなに?

(日色)

朝、昼、夕、毎日「明日は、パンだね。」とか、「明日は何?」とか、聞いて来るIさん。最近、間違っ

てしまったら、本人が「パンだね」と教えてくれました。本当は知っているんですけど、「明日なに?」これが彼のコミュニケーション

編集後記



今年の夏は本当に暑かった……。そして長かった……。連日のニュースでは「生命に危険が及ぶ暑さ」を報じ、北総でも例年以上に利用者の健康管理に緊張感を持って臨みました。そして、今年には自然災害が多い夏でした。6月末から7月初旬にかけて西日本を襲った集中豪雨。死者200人を超える甚大な災害となりました。また、9月6日には北海道胆振地方で震度7の大地震が発生しました。テレビで映し出される見たこともないような大規模な山崩れに言葉も出ませんでした。尊い命を落とされた皆様のご冥福をお祈りすると共に、一日も早い復興を願います。

今号は特集「酷暑の夏終わる…」と題しまして、本当に暑かった今年の夏を様々な角度から振り返り原稿に起こしました。表紙では広島のお寺尾先生からのお便りを掲載しました。寺尾先生のお言葉にもあるように「私たちは微力ではあるが無力ではない」という思いを、この夏大きな自然災害に見舞われた皆様への復興支援に繋げていきたいと思っています。

(絵鳩)



ンの一つなのかなと思いましたが、なにもかも 噛まずに飲み込む お弁当

ごはん何? 毎日たずねて ほっとする (小林)

■北総へ帰ろう。利用者にとって家へ帰るといふことは日々の生活の活力や希望です。ですが利用者によっては家庭の事情等で帰ることのできない方もいます。そういう現実を見ているといつもFさんが転院した日を思い出します。

朝、お別れに行くとき「元気になったら戻ってくるからまたね」と本人は



家へ帰ろう。北総(いえ)へ帰ろう。そう思ってくれたなら……。 (辻野)

帰園する気満々な様子でした。その姿を見て「ああFさんにとって帰る家はここ(北総)なんだ。」と……。 Fさんにとっての北総での生活がどれだけ幸せだったか。その一言に全てが詰まっていたように感じとれ涙が出そうになりました。「ああ私も一人でも多くの利用者にとって、帰ってくる場所、家、だと感じてもらえるように精進していこう。」と強く思いました。

